

平成 23 年度 第 1 回 石狩市文化財保護審議会 議事録

■日時：平成 23 年 10 月 21 日（金） 13:30～15:10

■会場：石狩市役所 403 会議室

■出席者

石狩市文化財保護審議会委員
村山耀一（会長に選出）
石井滋朗（副会長に選出）
河崎 盟
萬谷優子
事務局
樋口幸廣（教育長）
三国義達（生涯学習部長）
工藤義衛（文化財課長・学芸員）
志賀健司（文化財担当主査・学芸員）

■欠席者

高田 進
小松 勤
天野直子
寺田昭彦

■傍聴者

なし

■議事

1. 教育長あいさつ

2. 会長・副会長の選出

委員の互選により、会長に村山委員、副会長に石井委員を選出。

3. 諮問

- (1) 石狩市のこれからの資料館について
- (2) はまます郷土資料館のリニューアルについて

教育長より諮問

- (別紙諮問書のとおり)
- (工藤課長より諮問内容の説明)

(1) 石狩市のこれからの資料館について

村山：まず、石狩の文化財に対して、これは素晴らしい、あるいはこうしてほしいというものがあれば、みなさんの考え、思いを述べてください。

萬谷：浜益の郷土資料館の存在というのは、石狩湾の中で他の地域とつながりを持ち、歴史を分かち合える建物、過去の大切なモニュメントとあって、興味を持っていました。

石井：私は今年から始まった「いしかり館ネットワーク」(石狩市の社会教育関連4施設の連携)をサポートする市民の会に入っていて、各館をめぐるツアー(一般市民対象)を開催したのですが、参加21人中19人が書かれたアンケートを見たところ、砂丘の風資料館あるいは海浜植物保護センターに今回初めて来た、という方が、それぞれ6~7人もいました。もっと市民の方にアピールが必要ではないかと思いました。

河崎：旧石狩、厚田、浜益というのは、北海道の歴史の中では日本海側の蝦夷地、場所請負制度、アイヌとの関わりというのが、北海道の中でももっとも先進的で、歴史のあるところなので、もっとも重要な地域だと思います。合併前、3つの市町村がそれぞれの文化の継承や保護に取り組んでいましたが、外側から見てみると、そこに住んでいる人々が、自分たちの大切な文化財に気づいていない節があります。合併後も、その大切さに気づいていないと思います。合併したということは、お互い外から見るができるので、今回の文化財の保護のあり方を問うというのは極めて時期に適していると思います。さらに石狩市だけでなく、近隣、札幌市の人などが石狩市の文化財をどう思っているのか、そういう意見収集の場があってもいいと思います。が、まずは主体的に、石狩市がどう考えているのかが大事で、それがこの審議会の場だと思います。

村山：石狩市郷土研究会は月に1度の例会で石狩の歴史を学んでいます。また、古文書の解説をし、活字にして残していこうとしています。またはみなさんに披露するために、たとえばそんな成果を図書館まつりで展示する、といったことをしています。厚田の碑を調査して、冊子にして残していくこともしています。そのように石狩の文化財に関する調査、研究、保存、をやろうとしています。3つの資料館だけでなくもうひとつ、市民図書館にも調査研究でお世話になっています。そういったことから3館だけでなく図書館も含めた形で、これから石狩の文化財をどう保存するか、また、まだまだ圧倒的に多くの市民の方が石狩のことを知りません。そういった方々が耳を傾けるような、足を運ぶような方法を考えていかなければならないと思います。

諮問の内容の議論に入ります。石狩市のこれからの資料館について、図書館との連携も含めながら、どうすべきか、現状を見ながら、これからどうしたらいいか、お話ししてください。

石井：今年いろいろなイベントで3回資料館に行ったが、その1つ、普段は見せない部分を市民に見せる、というものがあつ、収蔵庫を見せていただきました。あれは「ご苦労だろうなあ」という印象を受けた(※注：収蔵庫が非常に狭く、すでに資料で満杯である、ということ)。

河崎：これまでいろいろ博物館・美術館に行っているが、帯広美術館の学芸員に話をうかがったら、帯広や北海道だけではなくいろいろな地域、異分野のものも集めているそうです。石狩で考えてみると、浜益「だけ」のものを集めるというのは、基本的にはいいと思いますが、それ以外にも、他の博物館、例えば網走からオホーツク文化に関する資料を借りてきて展示する、東北地方の土器を借りてきて砂丘の風資料館で展示する、といったこともあっていいのではないのでしょうか。すると来館者も多くなるのではないのでしょうか。

萬谷：先日新潟に行く機会がありました。新発田の豪農の家など見てきました。きっかけはホームページでした。ホームページによる下調べでかなりのことがわかって、こんなこともあるのか、と興味を持ってました。あのような形で情報提供があると、実際に行ってもおもしろいな、と思います。現地の方と一緒にいったがその人も地元のことを実はよく知らなかった。新発田城では案内のボランティアの方もいろいろ説明していただけて、大変よかったです。あのようなホームページの活用も良いと思いました。

村山：石狩でも資料館や市民カレッジなど、ホームページで情報を提供していますが、あのようなものは知りたい情報にたどり着くまでが、慣れていない人だと難しい。もっと工夫ができれば、多くの方に石狩の情報を知ってもらうことができるといいと思います。

本論に戻りますが、市内に資料館が3つあって、砂丘の風資料館も開館して5年以上経過し、老朽化とか入館者減少といった問題が出ています。どうしたらもっと活気に満ちた資料館になるのか。ここまで情報発信の話が出てきましたが、一方で、3つの資料館はあの場所でいいのか、展示の方法はあれでいいのか、そういった点を次は話していただけますか？

河崎：はまます郷土資料館は、場所はやはり現在地が適切です。歴史的に意味があります。展示に関しては、白鳥番屋では白鳥番屋の資料だけを展示するべきです。それ以外の資料は、将来的には別の資料館を建造し、そこに移すべきです。現状は「白鳥番屋」として考えると余計なものがあります。新しい資料館を造りそこに移すとなると、お金のかかる話であり、将来の課題となりますが、過渡期的にどうしたらいいかという、修復にはお金がかかり困難であることから、廃校になった校舎（浜益中学校）を使うのが、手っ取り早いでしょう。要は、番屋は番屋である、郷土全体の資料は別の資料館で扱うべきです。

石井：いかに花川の人をそこに呼び込むか、ということが大事だと思います。花川の人々はだいたい札幌に通勤していて、石狩という意識がありません。私も定年退職するまではまったくその通りでした。いしかり市民カレッジも現在 200 人くらい受講生が登録されているが、それくらいが限界という感じがします。札幌に通って、その後も石狩のことを何も知らないで一生を終わってしまう人が圧倒的に多い。調べてみれば石狩っておもしろい、当然資料館にも行きたくなる、のですが、どうやってそんな人々に知らしめるか、それが一番の問題だと思います。展示よりもそちらが先のような気がします。

村山：南線小の校長が「学校だより」で花川や樽川の歴史を紐解いて解説を書いています。そ

れが町内会の回覧板でまわってきます。こういうふうに学校でやっていただけるとありがたいです。札幌に通勤している方々が、子どもがもらってくる資料を見て、学校はこんな歴史があったんだ、住んでいるところは酪農地帯だったんだ、ということがわかります。市民が足を向けやすいような場所、展示内容、整理の方法が必要です。だけど3館とも狭い。花川は水田や畑、酪農地帯から30～40年の間に一気に変わってしまいました。そういうところも新しく石狩に来る方は知りません。開拓の歴史も展示できると良いのだが、この3つの資料館では狭いですよね。例えば開拓の歴史に関する特別展などもやってほしいのだが、学校など空いている場所を使って3館以外の場所も活用する、ということも考えてよいのではないのでしょうか。将来的には立派な博物館が欲しいけど、早急にはできないから、過渡期としてそういうことを考えてもよいのでは、と日頃思っています。

萬谷：浜益は漁業の歴史の中でどんなことをしていたかがわかるどころ、厚田は開拓のようすがまた違って来るし、いろいろな文学者も関わってきます。砂丘の風資料館は浜に関するもの。紅葉山49号遺跡の展示がここにあるのは、今はしょうがないですが、本来は、遺跡があった場所に史跡関係のものが欲しいと思います。だから、案内所となる総合的な、歴史をたどって時代別にどんなふうだったか、どこに行けばどんなものがあるか、という総合案内ができる施設がひとつあるといいなと思います。そこから発信していろいろなもの（施設、史跡、自然など）とつながりをつけていくことができるのではないのでしょうか。

村山：3つの資料館は距離的に離れています。興味がある方でも気軽に行くことができない。そういう面で、何かいい場所、展示会ができるような場所がほしいです。図書館の利用、あるいはそれに変わる良いスペースがあるといいです。

工藤：この先、みなさんのお話を整理していく中で、ある程度、何点かに絞って議論を深めていくことが必要かと思います。1つは「対象」です。どんな人々に見せることを考えていくのか。保護保存して後世に残していくモノも、どれを対象にするのか、ということがあります。文化財に指定されているものもあれば、指定されていないけれど価値のあるものもあります。望来でたくさん出る化石、あるいは自然、地形など、どこまで対象になるのか。そこをゼロから考えていただく機会が必要ではないのでしょうか。もうひとつ、資料館でどういうことをするのか、どういう役割を持たせていくのか、ということも必要だと思います。たとえば浜益は保存する場所であると同時に建物自体が文化財でもある。そういう在り方もあるでしょうが、石狩の資料館というのは何をするとところなのか、そこに行くとなんができるところなのか、そんな点も考えて、議論を深めていただきたいと考えています。これについてはまたあらためて、こちらも準備をして、議論の場を用意したいと考えています。

村山：「資料の保管・展示」ということもあるが、ここでもうひとつ投げかけておきたいのが「収集」です。資料館職員が収集するのもあるし、市民が寄贈したいというものもあります。市民から寄贈したい、とあった場合、保管場所も含めて、どの程度受け入れる余地があるのでしょうか？

工藤：たとえば今は農機具は基本的にお断りしています。すでに十分に収集している、ということもあるし、農機具は非常に大きいものが多いので、保管場所の問題もあります。

村山：花川に住んでいる方が高齢化して世代交代、あるいは家を建て替える、厚田・浜益でも高齢化で跡を継ぐ者がいない、あるいは古い家にある物がそのままとか、そういった形で資料館で持っていない貴重なものもかなりあるかもしれません。そういうものも、寄贈されなくても、どこに何があるということをチェック・調査する、というのはどうなのでしょう？

工藤：過去に、寄贈していただかなくても、そういう古いものがないか呼びかけたことはありますが、持っている方自身が、価値があるかどうかはつきりしない場合が非常に多い。あっても存在を忘れていたりとか、自分たちで価値を見いだすことができない、というところがあります。近年、博物館関係者で注目されているのが絵日記です。その時代の性格をよく反映しています。しかしほとんどの家庭では処分されてしまう。そのような資料価値は一般の方には気づかれにくいものです。こちらからの呼びかけが必要な部分ではあります。美術品などは価値がわかりやすいが、そういったものは反対に寄贈していただくことが難しくなります。

萬谷：絵日記の重要性はどこかで発信はしていますか？

工藤：特に呼びかけはしていませんが、訪ねた先で何かの機会に出てきたときなどは、寄贈していただく、ということは過去には何回かありました。例えば小樽の博物館では積極的に収集しています。

村山：古い歴史だけでなく、南北花川の団地に人が入ってきてもう40年近くなります。そろそろそのあたりも石狩の歴史の重要なポイントになってきているので、その資料も収集していければいいと思っています。

砂丘の風資料館では、紅葉山49号遺跡、漁業、缶詰、海の関係。厚田資料室は4人に絞った展示。はまます郷土資料館は漁業。この3つの展示のしかた、これはどうですか？

河崎：みなさんの意見を聴いて、この3つの資料館に共通しているのは、その地域の通史的なものがないということです。全体の歴史がわからない。資料館にとって通史が必要かどうかという議論もあるが、行って、見る立場では、ある程度あったほうが理解が深まる気がします。

萬谷：今言っていた花川の開発の資料は大事ですね。

村山：一般の方の持っているもの、貴重なものなどが集まるといいですね。

(2) はまます郷土資料館のリニューアルについて

村山：現状では内部がゴチャゴチャしている、建物そのものが老朽化している。どうすればいいのでしょうか。さきほどは展示は白鳥番屋だけに限定したほうがいい、というお話でしたが。

河崎：白鳥番屋で使った漁具・船に加えて、妥協をしますと、浜益で使われた漁業に関連するものまでにして、他は別の建物でやったらどうでしょうか。もちろん用地、お金、運営管理の問題は出てきますが、考え方としては、そうです。

村山：あそこにはヤン衆が寝起きした場所のような当時のことを示す場所がありますが、そこが今は物がいっぱい置いてある。それが来館者がよく理解できない要因となっている面はあると思います。建物本体をしっかり直すという面もあるし、中身をもう少し整理する必要もあります。しかし中身はまた貴重なものがある。そんなものもまたどこかで展示できれば一番良いわけですよね。それにはどうしたらいいのでしょうか？

萬谷：ハママシケ陣屋跡でまとめて展示して、歴史パークのような感じにして、遊んだりレクリエーションに使えるような場所にできないものでしょうか。

河崎：今あの場所にはあるのは門柱だけです。それだけでは見に来るとするのは難しいでしょうから、あの門柱をくぐっていったら、そこに浜益の郷土資料館があるといい。立地の意味もよくわかります。

石井：そもそもはまます資料館は、来館者数はどれくらいなんですか？ また、地元の方はどう思っていますか？ 関心は持っているのでしょうか。ここにいる人（出席している委員）はみんな旧石狩なので、地元の方がどう思っているかを踏まえないとまずいのでは？

萬谷：それは浜益の学校や教委の扱い方にもよるのではないのでしょうか。

村山：学校はそのときどきの先生にもよりますが、現在の浜益小学校の校長は非常に熱心です。

工藤：入館者数は年にもよるが、1500～3000人／年くらい。地元の方が見に来ることはそれほど多くはないでしょう。

河崎：私は幼少の頃、浜益に住んでいましたが、浜益に今住んでいる人は、白鳥番屋が自分たちに何らかの関わりがあるとか、そこで何か発見ができるとかいう認識は持っていないと思います。しかし心の中では、現存する2つしかない番屋の1つとして、貴重な文化遺産であることは当然思っています。浜益出身者からなる「札幌浜益クラブ」というものがありますが、そのメンバーは「白鳥番屋は極めて貴重である」という認識をもっています。浜益に帰った時には必ずそこに行きます。入館者1500というのは、村の人々ではないでしょう。これは看板やパンフレット掲載など、宣伝の問題があります。

村山：はまます郷土資料館の看板は、うっかりすると見逃してしまいます。建物は国道から見えないし。

番屋を老朽化のためにリニューアル、修理しなければならないとすれば、その間、資料はどの

ように保管すればよいでしょう？

河崎：補修工事をする際に支障のある資料はすべて、どこかに移さなければなりません。今廃校になっている中学校に一度全部移したらどうですか？ 臨時にあそこを郷土資料館として見てももらうこともできます。番屋の建物は、屋根、壁、基礎すべて、旧長野商店と同様に建物自体が文化財であるという観点で評価すべきです。それぞれの部材を本来の姿に補修していただきたい。

村山：建物の改修が終わった後はどうすればいいでしょう？ また資料を白鳥番屋の中に戻すことが望ましいか、それとも別の場所に分けるのがよいのでしょうか。

河崎：番屋で使っていたものは、やはり戻したほうがよいです。当時と同じ姿で展示するほうがよいです。ヤン衆が寝ていた場所、親方の部屋との違い、などのイメージが湧くように。

工藤：今日のところはみなさんにいろいろアイデアを出していただいたので、このあと整理させていただいて、また意見をうかがえればと思います。

村山：望ましい考え方は、番屋は番屋の展示、ということで、独立できるような考え方で進めたいと思います。資料館の看板とともに、たとえば地名などの看板もあれば、昔をイメージできる気がします。

萬谷：黄金山もあるし、そこらへんでひと遊びできるような工夫があるといいですね。

村山：ちょっと留萌方面へ車で行ってみたときに、ちょっと寄ってみたいな、と思えるようなアピールのしかたがあるといいですね。

4. 報告「平成 23 年度文化財保護関係事業について」

(志賀学芸員より説明)

(生涯学習部長あいさつ)

以上

議事録を確認しました。

平成 23 年 11 月 18 日
石狩市文化財保護審議会
会長 村山耀一